河沙魚

林芙美子

青空文庫

空は暗く曇つて、霧々と風が吹いていた。水の上には菱波が立っていた。いつもは、霧の立ちこめているような葦の繁みも、からりと乾いて風に吹き荒れていた。ほんの少し、堤の上が明るんでいるなかで、茄子色の水の風だけは冷たかった。千穂子は釜の下を焚きつけて、遅い与平を迎えかたがた、河辺まで行つてみた。——どんなに考えたところで解決もつきそうにはなかつたけれども、それかと云つて、子供を抱えて死ぬには、世間に対してぶざまであつたし、自分一人で死ぬのは安いことではあつたけれども、まだ籍もなく産院に放つておかれている子供が、不憫でもあつた。

吹く風は荒れ狂い、息が塞りそうであつた。菱波立っている水の上には、大きい星が出ていた。河へ降りてゆく凸凹の石道には、両側の雑草が叩きつけられている。岸辺へ出ると、いつもは濡れてぬるぬるしている板橋も乾いて、びよびよと風に軋んでいた。

窓ガラスのように、堤ぎわの空あかりが、茜色に柵引き光っていた。小さい板橋を渡つて、昏い水の上を透かしてみると、与平が水の中に胸にまでつかつて向うをむいていた。

「おじいちゃん！」

風で声かどかないのか、渦うずを巻まいているような水のなかで、与平は黙然もくねんと向うを向いたままでいる。口もとに手をやって乗り出すような恰かつこう好こうで千穂子ちほこがもう一度、大きい声で呼んだ。ずうんと水に響ひびくような声で、おおうと、与平がゆつくりこつちを振り返ふった。

「もうご飯だよッ」

「うん……」

「どうしたんだね、水の中へはいってさ。冷えちまうじやないかね……」

与平はさからう水を押おしわけるようにして、左右に大きく軀からだをゆすぶりながら、水ぎわに歩いて来た。棚引たなひきいていた茜色あざみいろの光りは沈しずみ、与平の顔がただ、黒い獣けもののように見える。なまぐさい藻もの匂においがする。近間で水鳥みづどりが鳴いている。与平が水のなかに這はい入りこんでいたのが、千穂子ちほこには何となく不安な気持ちだった。

「風邪かぜをひくだよ。おじいちゃん。無茶なことしないでね……」

「網あみを逃にがしてしまったで、探たずねとつたのさ」

「ふん、でも、まだ寒いのに、無理するでないよ……」

「うん、——まつは起きてるのかえ？」

「起きてなさん」

「ふうん……えらい風だぞ、夜は風になるな」

ずぶ濡れになつたまま、与平はがっしりした軀つきで千穂子の前を歩いて行く。腿のあたりには、濡れたずぼんがからみついていた。裏口の生垣に咲いているこでまりの白い花の泡が、洗濯物のように、風に吹かれていた。千穂子は走って、台所へ行き、釜の下をのぞいた。火が燃えきつていた。あわてて松葉と薪をくべると、ひどい煙の中から炎がまいたつて、土間の自転車の金具が炎で赤く光った。

千穂子は納戸から、与平のシャツと着物を取つて来た。濡れたものをすっかり土間へぬぎすてて、裸で釜の前に来た与平はまるで若い男のような軀つきである。千穂子は炎に反射している与平の裸を見て、誰にともなく恥ずかしい思ひだった。

「おじいちゃん、風邪ひくで……」

「うん、気持ちがいいんだよ」

与平は乾いた手拭で、胸から臍へかけてゆつくりこすつた。千穂子がかたづく以前から飼っている白猫が、のっそりと与平の足もとにたたずんでいる。小さい炉では、鍋から汗が煮えこぼれていた。与平はシャツを着て、着物を肩に羽織ると、炉端に上つて安坐

を組んで煙草たばこを吸った。人が変わったように千穂子ちほこが今朝けさ戻もどつて来てからと云うもの、むつ
つりしている。——今日きょうは戻もどつて来るか、明日あしたは戻もどつて来るかと隆りゅう吉きちを待つ思いでい
ながら、いつの間にか半年はたつたのだが、隣となり町まちの安造やすぞうも四日ほど前に戻もどつて来た
と云う話を聞いた。すべては与平と相談の上で、何もかも打ちあけて隆吉に許こしを乞こうよ
り道はないと、二人の話はきまっているのではあつたけれども、与平が何となく重苦しく
なっているのを見ると、千穂子はいてもたつてもいられない、腫はれものにさわるような気
持ちだつた。千穂子は今いまは一日が長くて、住み辛づらかつた。姑しゅうとの膳ぜんをつくつて奥おくへ持つて行
くと、姑のまつは薄目うすめを明けたまま眠ねむつていた。枕まくらもとへ膳を置き、「おかあさん、ご飯
だよ」と呼んでみたけれど、すやすや眠ねむつていた。千穂子のかえつてほつとして、そこへ
膳を置き、炉端へ戻もどつて来た。

「よく眠ねむつてる……」

「うん、そうか、気分がいいんだろ……」

「おじいちゃん、そこに酒さけついてますよ」

炉すいの隅すみの煉瓦れんがの上に、酒のはいつた小さい土瓶どびんが置いてある。与平は、汚よごれたコップを
取とつて波々と濁どろ酒ぶらうくをついで飲のんだ。千穂子ちほこは油あぶら菜なのおひたしと、汁じゆを大おお椀わんに盛もつて

やりながら、さつき、水の中へはいつていた与平のころもちを考えていた。死ぬ気持ち
 であんな事をしていたのではないかと思えた。そんな風に考えて来ると涙が溢れて来るの
 である。ざあと雨のような風の音がしている。もう、この風で、最後の桜の花も散つてし
 まうであろう。千穂子は猫にも汁飯を少しよそつて、あがりつぱなに井を置いてやった。

「伊藤とか云う人の話はまだきまらねえのか……」

小さい声で、与平がたずねた。千穂子は不意だったので、吃驚したように与平の顔を
 見た。いままでも、小柄で痩せていた千穂子ではあつたけれども、子供を産んでしまうと、
 なおさら小さくなつたようで、与平は始めて、薄暗い燈火の下で千穂子の方を見た。伊藤
 と云うのは、千葉の者で、千穂子の子供を貰つてもいいと云つてくれる人であつたが、産
 婆の話によると、もう少し、器量のいい赤ん坊を貰いたいと云う事で、話が沙汰やみのよ
 うになつていたのであつた。千穂子の赤ん坊は月足らずで生れたせいか、小さい上にまる
 で、猿のような顔をしていて、赤黒い肌の色が、普通の赤ん坊とは違つていた。赤ん坊は
 生れるとすぐ蟹糞をするのだけれど、まるでその蟹糞色のような黒い肌であつた。
 ——藁の上から、親切な貰い手があれば一番いいのである。産み月近くには、二人ばかり
 貰い手の口もあつただけれど、いざ生れて、猿つこのような赤ん坊を見せられると、二

人の貰い手は、もつと器量のいい子供をと云うことになつたのであろう。千穂子は日がつにつれ気持ち焦^{あせ}つて来た。このまま誰も貰い手がないとなると、与平との相談も、もう一度しな小さなくてはならないのだ。与平も、赤ん坊の片づく話を待っていたのだけれども、千穂子の顔色で、うまく話に乗つてゆかなかつたと云うことをさとしていた。

「伊藤さんも、このごろ、少し、気が變つて男の子がいいと云うのさ……」

私の子供は器量が悪いから駄目^{だめ}だつたのだとは云いづらかつた。乳もよく出るのではあつたけれども、どうせ手放す子供なら、早くした方がいいと云うので、生れるとすぐ乳は放してしまつた。そのせいも、小さい軀は皺^{しわ}だらけで、痩せた握りこぶしをふりあげている。恰好^{かっこう}は哀れ^{あわ}で見えいられなかつた。親指を内側にして、しっかりと握りこぶしをつくつているので、湯をつかわせる時には、握りこぶしのなかに、袂^{たもと}ぐそのような汚れたものをつかんでいた。

「やっぱり、金でもつけねえと駄目か……」

千穂子はふつと涙が突きあ^つげて来た。腰^{こし}の手拭で眼^めをこすつた。

隆吉が兵隊に行つて四年になる。千穂子との間に、太郎と光吉と云う子供があつた。あとに残つた千穂子は、隆吉の父親の与平の家に引きとられて暮すようになり、骨身をおしまず千穂子は百姓仕事を手伝つていた。そのままゆけば何でもないのであつたけれど……。千穂子は臆病であつたために、ふつとした肉体の誘惑を避けることが出来なかつたのだ……。一度、軀を濡らしてしまえば、あとは、その關係を断ち切る勇氣がなかつた。若い女にとつて、良人を待つ四年の月日と云うものはあまりに長いのである。良人の父親と醜いちぎりを結ぶにいたつては、獣にもひとしいと云う事は、いくら無智な女でも知つているはずであるのに……。田舎の実科女学校まで出た千穂子が、こうしたあやまちを犯し、あまつさえ、父との間に女の子を生んでしまつたと云うことは哀しい運命に違いない。子供がまだ腹にあるうちに終戦になつた。復員の兵隊を見るたびに、千穂子も与平も罪のむくいを感じないではいられなかつた。姑のまつは中風症で、もう五年ばかりも寝たきりである。家のものの眼を怖れる事はなかつたけれども、千穂子は、ぶざまな姿で良人に会う事が身を切られるように辛かつた。世の妻たちは、一日も早く良人の復りの早いのを祈つていと云うのに……、千穂子は、一日も遅く良人が帰つて来ることを祈つていた。早く身二つになつてから、良人の前に罪を詫びたいと思つたのだ。――

— 妙なことには、遠きもの日々とうとして、日夜、一緒に暮している与平へ対する愛情の方が、いまでは色濃いいものとなつていただけに、千穂子はその情愛に悩むのである。隆吉の姿がいまではぼやけてしまつて、風船のように、虚空に飛んでしまつてゐる。—— 与平も千穂子も寅年であつた。二匹の雌雄の虎がううと唸りながら、一つ檻のなかで荒れ狂つてゐるような思い出が、千穂子の軀を熱く煮えたぎらせた。若い男とささやきあうような口先で、秘密をつくるようなことはしなかつた……。ただ、偶然に、讐敵に会つたような、寅年の二人の肉体が呼びあつたのだ。田の字づくりの四部屋ばかりの家で、北の一部は板の間の台所。台所の次は納戸で、ここには千穂子達の荷物が置いてあつた。東の六畳に始め、千穂子たちは寝ていただけでも、朝晩の寢床のあげおろしに時間がとれるので、いつの間にか、千穂子達は万年床のままに置きにふさわしい、与平達の六畳の寢床を使うようになっていた。高い窓が一つあるきりで、その窓ガラスも茶色にくもつてまるきり戸外は見えないまでに汚れてしまつてゐる。襖をたてると昼間でも黄昏のように暗い部屋だつた。押入れのはめこみの中の仏壇の前に、姑のまつが寝たつきりであつた。その次に与平の寢床、真中は子供二人の寢床。それでもう狭い部屋はいっぱいになつてしまふ。夏も冬も、千穂子は子供達の後から寢床へはいりこんで眠つた。七ツにな

る太郎は、時々、朝、大きい声で、「おじいちゃん、昨夜、おれの寢床へはいりこんで来たよ。寝ぞう悪いんだなあ……」と笑った。四ツになる光吉も片言で、「おじいちゃん、怖い夢みたのかい？」と聞いている。千穂子は子供の前に赧あかくなった。与平はぷつぷつとして子供からそっぽを向いた。——与平も苦しまなはずはないのだ。毎晩、どんな工面くめんをしても酒を飲むようになっていた。だけど、酒を飲むと人が変わったように与平は感傷的になり、だらしなくなっていた。酒に酔よつて帰った与平に対して、千穂子が怒おこってぷりぷりしていると、頻しきりに頭をこすりつけてあやまるのだ。深酒をした夜など与平の気持ちは乱れて、かっと眼を開いているまつの前でも与平は千穂子に泣くようにしてあやまるのである。与平にとつては、嫁よめの千穂子が不憫かわいで可愛かわいくて仕方がないのであつた。隆吉に別れている淋さびしさが、千穂子との間にだけは、自分の淋さびしさと同じように通じあつた。千穂子も淋さびしくて仕方がないのだと、まるで、自分の娘むすめを可愛かわいがるようなくさで、千穂子の背中をさすり、子守唄こもりうたを歌なぐさつて慰なぐさめてやりたくるのである。その可愛かわいさがだんだん太ふと々しくなり、しまいには食い殺ころしてしまいたい気持ちになるのも酒の沙汰さただけは云えないのだ……。器量のいい女ではなかつたけれども、餅もちのようにしんなりした肌をしていた。よく光る眼をしていた。眉まゆは薄く、顔つきもまんまるだったが、茶色の眼だけは美しかつ

た。髪も赤つ毛で縮れていた。K町の実科女学校に行っている頃、与平は千穂子にたびたび道で出逢った。ちつとも目立たない娘であった。そうした無関心でいた娘が、隆吉の嫁になって来てから、今日に到るまでの事を考えると、与平は偶然な運命と云うものを妙なものだと思つた。深酒に酔つて、しばらくごうごうといびきをたてて眠ると、夜中になつて、与平は本能的に何かを求めた。暗がりの中で、まつが眼を覚ましていようといまいと、与平はかまつていられないのだ。考える事と、行動力は別々であった。皮膚を一皮むいてしまいたいような熱っぽい感じなのである。一日一日罪を贖つてゆく感じだった。夜になると、千穂子へ対する哀れさ不憫さの愛が頂点に達してゆくのだった。昼間、決断力が強くなっている日ほど、夜になると、不逞きわまる与平の想像がせきを切つて流れて行つた。相手が動物になつてしまうと、もう、与平にとつて、哀れでも不憫でもなくなる。意識はひどくさえぎえとして来て、自分で自分がしまいには不愉快になつて来るのだ。自分の寝床へ戻つて来ると、息子へ対してしみじみと自責の念が湧き、千穂子と云う女が厭になつて来るのであつた。千穂子に限らず、あらゆる人間が厭になつて来るのであつた。その厭だと思ふ気持ちが、前よりもいっそう人づきあいの悪い老人になり、千穂子が荒川区のある産院に子供を産みに行つてからは、与平は釣ればかりして暮していた。釣りをしている

時だけが愉しみであった。与平だけでは二人の子供のめんどうは見られないので、千穂子は与平に頼んで、葛飾にある、自分の実家の方に二人の子供をあずけた。母と姉とが、このごろ野菜の闇屋になつて暮していた。姉の富佐子は、結婚していたけれど、良人が日華事變の当時 出征して戦死してからと云うもの、勝気で男まさりなところから、子供のないままに、野菜荷をかついで東京の町々へ売りに行つて、いまでは小金も少しは貯め込んでいた。野菜がない時は、静岡まで蜜柑を買いに行つたり、信州までリンゴを買いに行つたりした。終戦になつてからも、ずっと商売はつづけていた。男の運び屋のように、たくさんの荷を背負つては来なかつたが、リンゴも三度に一度は取りあげられると、浮ぶ瀬がないので、味噌とか、ゴマのようなものを混ぜて買つて来ては、結構利潤がのぼつていた。

富佐子は久しく、千穂子に逢う事がないので階川の家の様子も判らなかつたけれども、母親の梅は、様子の変つて来ている千穂子と与平の關係をそれとなく感じている様子だった。与平が怒りつばい男なので、ただ、そんな話にふれる事をさけているきりであつたが、心のうちでは、梅は娘の身の上をひどく案じていた。

千穂子は女の子を産んだ。

肉親の誰一人にも診^みててもらうでもなく、辛い難産であった。太郎や光吉の時も、このような苦しみようはしなかったと思うほどな辛さであった。——階川の家には、隆吉と与平の自転車が二台あったのを、与平は自分のを売って金に替^かえて、千穂子に持たせた。土地もない小百姓だったので、現金も案外持つてはいなかったし、与平にとっては、自分の貯^{たくわ}えの中から、お産の金を出すと云う事は、隆吉に顔むけならない気持ちで、自分の自転車は盗^{ぬす}まれた事にすればよいと思つていたので。

女の子が生れたと聞いても、与平は別にうれしくもなかった。隆吉の下に霜^{しもえ}江と云う娘があつたけれど、十一の時に肺^{はいえん}炎で死なせてしまった。いま生きていれば、二十三の娘ざかりである。

与平は仄^{ほのぼの}々々といい気持ちに酔つて来た。やがて隆吉が戻つて来るという事が少しも不安でなくなり、慰めでさえあるような気がした。早く逢いたいと思つた。ラジオで聞く、リバテイ型という船に乗っている、兵隊姿の隆吉のおもかげが浮んで来た。千穂子との、狂った生活も、いまではすっかり落ちつくところへ落ちついて……だが、何事もひ

しかくしにして済まされるものではあるまいと思っていた。そう思つて来ると、与平はずしんと水底に落ちこむような孤独こどくな気持ちになつて来た。酒のせいか、さつきほど、思いつめた気持ちにはなれなかつたが、もう少し、呼んでくれる千穂子の声がしなかつたら、あの風の中に、河へはいつたまま与平はそのまま網と共に、自分も流される気でいたのだ。水の中へ少しづつはいつてゆくと、寒さもかえつて判らなかつたし、水の上は菱波立つていながら、水の底は森々とゆるく流れてなまぬるかた。くいなのような鳥の音が、ぎやあと遠くに聞えているのも耳についていた。与平は一步ずつゆるく川底にはいつてゆきながら、眼をすえて水の上を眺ながめていた。石油色のすさびた水の色が、黄昏のなかに少しづつ色を暗く染めていつた。水しぶきが冷たかつた。そのくせ、河明りの反射が、まるで秋のようにさえざえしていた。

「どの位、金をつけりやいいのさえ？」

与平が引つこんだ眼をぎよろりと光らせた。さて、いくらつけたらよいかと問われて、千穂子は、このごろの物価高の相場を吊りあわせる金銭の高が云えなかつた。こうした不幸な子供の貰い手には、金が目当てで、筋のよい子なら、一万円もつけるのもあるだろうけれど、普通ふつうに云つても、千円や、二千円はつけなければならぬのだ。

「新聞に出してもらったか？」

「ええ、一度出してもらったんですけど、てんからないんですよ。虫眼鏡むしめがねでみるような広告が、新しい新聞で八拾円なんですよのね」

千穂子は心のうちで、もう一度、伊藤さんに頼んでみようと思った。心は焦りながら、そのくせ、一日しのぎで、千穂子は上の男の子達よりも不憫がまして来ているのである。

貰われてゆけばすぐ死にそうな気がした。自分の勝手さだけで、子供をなくしたくない執し着ゆうぢやくが強くなり、今朝、産院を出て来たばかりなのに、さつきから、赤ん坊の事が気に

かかって仕方がないのだ。千穂子のもう一つの考えの中では、姉に打ちあけて、姉の子供にしてもらいたかった。

「いいんだよ。私が勝手に何とか片をつけるもん、おじいちゃんは心配せんでもいいのよ……」

与平はコップを持っていた手を中途ちゆうとでとめて、じつと宙を見ていた。大きい耳がたれさがって老いを示していたが、まだ、狭い額には若々しい艶つやがあつた。白毛まじりの太い眉の下に、小さい引つこんだ眼が赤くただれていた。

「何とかなるで……金の工面をした方がよかろう？」

「うん、だけど、これ、私の考えだけどねえ、私、姉ねえさんに話してみようかと思うんだけど、どうでしょう……。そして、隆吉さんが戻つて来る前に、私、女中でも何でもして働はたらきに出ようと思つてるんだけど……」

「ふん、太郎と光吉はどうするんだえ？」

太郎と光吉の事を云われると、千穂子はどうにも返事が出来ないのだ。新しい嫁を貰つてもらおうわけにはゆかないものだろうかと、千穂子は心の底で思うのだった。血ちなまぐさ腥せいいことにならなければよいがと云う気持ちと一緒に、隆吉が思いきりよく、新しい嫁を選んえらんでくれればよいと云つた様々な思いが、千穂子の頭の中を焙あぶるように弾はせているのだ。

隆吉からは同情的な施ほどこしを受けてはならないと思つた。殴なぐるか、蹴けるか、どんなにひどい仕打ちをされてもかまわないと思うのである。自分と云う性根のない女を、思いきり虐さいなんでももらわなければならぬような気がした。そのくせ、千穂子は与平を憎悪ぞうおする気持ちにはなれなかつた。俎まないた板いたの上で首を切られても、胴どうたい体たいだけはびくびく動いている河か沙魚わはぜのような、明瞭はつきりとした、動物的な感覚だけが、千穂子の脊筋せすじをみみずのように動いているのだ。

風が弱まり、トタン屋根を打つ雨の音がした。なまあたたかい晩春の夜風が、どこから

ともなく吹き込む。麦ばかりのような黒い飯をよそって、千穂子は濁酒を飲んでいる与平のそばで、ぼそぼそと食べはじめた。

風のむきで河の音がきこえる。与平は、空からになったコップを膳の上に置いて、ぽつねんと、井をなめている猫を見ていた。

「おじいちゃん、私、ご飯を食べたからかえりますよ」

「うん……」

「変な気をおこさないで下さいよ。おじいちゃんがそんな気を起すと、私だって、じつとしてはいられないもの……」

与平は眼をしょぼしょぼさせていた。薄暗い電気の光りをねらって、かげろうのような長い脚あしの虫が飛びまわっている。——与平が五十七、千穂子が三十三であつたが、お互いたがは、まるで、無心な子供に近い運命しか感じてはいないのだろう……。二人とも、ただ、隆吉だけを恐ろしいと思うだけである。そのくせ、隆吉に対する二人の愛情は信仰しんこうに近いほど清らかなものであつた。

まつが、起きたような気配けはいだったので、千穂子は箸はしを置いて奥の間へ行つた。暗い電気の下で、ぶるぶる震える手つきで、飯をぼろぼろこぼしながらまつは食事をしていた。

「おかあさん、起きたの知らなかったんだよ」

甲斐甲斐しく膳を引きよせて、千穂子は姑の口へ子供へするように飯を食べさせてやった。——隆吉は、千穂子より一つ下で世間で云う姉女房にようぼうであつたが、千穂子は小柄なせいも、年よりは若く見えた。実科女学校を出ると、京成電車の柴又しばまたの駅で二年ばかり切符売りをしたりした事もある。隆吉にかたづく二十五の年まで浮いた事もなく、年をとつても、てんから子供のようななりふりでない。

隆吉との夫婦仲ふうふなかは良かった。隆吉は京成電車の車掌しやしやうをしていたが、それも二三年位のもので、あとはずっと、与平に手伝つて、百姓をしたり、土地売買のブロオカアのよな事をして暮していた。中学を途中でやめた、気性の荒い男だったが、さっぱりした人好きのされる性質で、千穂子よりは二つ三つ老ふけて見えた。背の高い、ひよろひよろしているところが、弱そうに見えたけれど、芯しんは丈夫じやうぶで、歩兵にはもつて来いだと云う人もあつた。

千穂子は、その夜泊とまつた。

翌る日、千穂子が眼をさますと、もう与平は起きていた。うらうらとした上天気で、棚引くような霞がかかり、堤の青草は昨夜の雨で眼に沁みるばかり鮮かであった。よしきりが鳴いていた。炉端の雨戸も開け放されて気持ちのいいそよ風が吹き流れていた。

与平は炉端に安坐を組んで銭勘定をしていた。いままで、かつて、そうしたところを見たこともなかっただけに、千穂子は吃驚して、黙って台所へ降りて行った。

「おい……」

与平が呼んだ。千穂子が振り返ると、与平はむっとりしたまま札を数えながら、

「今日、これだけ持つて行って、よく、頼んでみな……」

諸を売ったり、玉子の仲買いをしたり、川魚を売ったりして、少しずつ新円を貯めていたのであろう、子供が幼稚園にさげてゆく弁当入れのバスケットに、まだ五六百円の新円がはいっていた。

「千円で何とかならねえか、産婆さんに聞いてみな……貧乏なんだから、これより出せねって云えば、どうにかしてくれねえものでもねえぞ……」

「ええ、これから行って、よく相談します」

千穂子は髪ふりみだしたまま、泣きそうな顔をして、モンペの紐で鼻水を拭いた。涙が

出て仕方がなかった。中国にいる隆吉のかえりも、もう間近であろうと云う風評である。千穂子は、産院へ戻る前に、姉の富佐子に打明けて相談を試みかけた。どうせ、あんな赤ん坊に貰い手はないとあきらめるより仕方がないのだ……。犬猫を貰ってもらうように簡単な訳にはゆかない。器量のいい赤ん坊でなかった事が不幸ではあったけれど、千穂子自身は、生れた赤ん坊に、一ヶ月近くもなじんで来ると、器量なぞのよしあしなぞ親の慾目よぐめで考える事も出来なかった。ただ、不憫がまずばかりだったし、与平に一眼だけ見せたくてたまらなかった。どこかへ貰われてゆく前に、一眼だけ、与平に見せて抱だいてもらいたかったのだ。

千穂子は台所へ降りて、竈かまどに火をつけて、すいとんをつくった。裏口へ出ると、米をまいたように、こでまりの花が散り、つつじの赤い花がむらがって開いていた。霞立ったような河の水が、あさぎ色にあたたかく明るんで、堤防の下を行く子供達の賑にぎやかな声があった。千穂子は、太郎たちの事を思い、切なかつた。家を飛び出す事も出来なければ、死ぬのも出来ないのも、みんな子供達のためだと思つと、千穂子はどうしようもないのである。頭が混乱してくると、千穂子は、軽い脳貧血のようなめまいを感じた。

食糧しょくりょうを風呂敷包ふろしきづつみにして、千円の金を持つて千穂子は産院に戻つて来たが、赤ん坊

はひどい下痢げりをしていた。産婆の話によると伊藤さんは他から、器量のいい二つになる赤ん坊を貰ったと云う事であった。千穂子はがっかりしてしまった。産院に千円の金をあずけて、三日目にまた与平のところへ相談に戻って来たが、与平はひどく機嫌きげんをそこねて、いつとき口も利きかなかつた。

「これは運だから仕様がなけれど、当分、貰い手がつくまで、あずかってもらっておこうと思うんだけど、一度、おじいちゃんにも聞いてみようと思つて……私だつて、ただ、ぶらぶらしてるンじやないンですよ。困つちやつたンだモン」

「昨夜、富佐子が来て、太郎たち引取つてもらいてえと云つて来たよ」

「あら、そうですね……もう二ヶ月以上にもなりますからねえ……男の子は手がかかるしねえ」

与平たけのこは筍を仕入れて来たと云つて、これから野菜と一緒にリヤカーで、東京の闇市やみいちへ売りに行くのだと支度したくをしていた。

「おい、隆吉が戻つて来たぞ……」

ぼつんと与平が云つた。

千穂子のはつとして眼をみはつた。

「手紙が来たの？」

「うん、佐世保から電報が来た」

与平はもう一日しのぎな生活だったのだ。千穂子は気が抜けたような恰好で、縁側に腰をかけた。表口へ出る往来添いの広場に、石材が山のように積んである。千葉県北葛飾郡八木郷村村有石材置場と云う大きい新しい木札が立てられた。千穂子は腰かけたなり、その木札の文字を何度も読みかえしていた。その墨の文字が、虫のように大きくなったり縮んだりして来る。長閑によしきりが鳴いている。

「おじいちゃん。隆さん、いつ戻るの？」

「明日あたり着くんだろう……」

色の黒い商人風な男が、玉子はないかと聞きに来た。与平は顔なじみと見えて、部屋から玉子の籠を出して来ると、玉子を陽に透かしては三十箇ばかり相手の籠に入れてやった。男は釣銭はいらないと云って、百円札を置いて行つた。その男の後姿を見て、千穂子は何と云う事もなくぞつとするようなものを感じた。死神とはあんなものではないかと思えた。片耳が花の芯のように小さく縮まってしまつて、耳たぶがなかったのだ。

「ああ、気持ちの悪い男だね……」

千穂子は立つて行つて、しばらく男の後姿を眺めていた。与平はやがて支度が出来たのか、隆吉の自転車にリヤカアをくくりつけて、「夜にやア戻つて来る」と云つて出掛けた行つた。

千穂子は与平が出て行くと、裏口へまわつて、奥の間へ上つた。まつは、不恰好な姿で、這うようにしておまるをかたづけしていた。

「おしつこですか？」

もう用を足したと見えて、まつはものうそうに首を振っている。痩せて骨と皮になつていたけれど、まだまだ生命力のあると云つた芯の強そうな様子があつた。

「おばあちゃん、隆吉さんが戻つて来ますよッ」

千穂子がまつの耳もとでささやくと、表情の動かないまつは、じいつと千穂子の眼をみつめていた。千穂子はみつめられて厭な気持ちだつた。隆吉が戻つて来れば、もう、いっぺんにこの静かな河添いの生活から切り離はなされてしまうのだと淋しかった。千穂子はたまらなくなつて裏口へ出て行つた。半晴半曇の柔やわらかい晩春の昼の陽が河の上に光りを反射させている。水ぎわに降りて行つた。もう、追いつめられてしまつて、どうにもならない気持ちだつた。「死ぬッ」千穂子は独りごとを云つた。死ぬもしないくせに、こころがそんな

事を云うのだ。肉体は死なないと云う自信がありながら、弱まった心だけは、駄々をこねているみたいに、「死ぬッ」と叫んでいる。

四囲あたりは仄々と明るくて、どこの畑の麦も青々とのびていた。

苔こけでぬるぬるした板橋の上に立つて、千穂子は流れてゆく水の上を見つめた。藁屑わらくずが流れてゆく。いつ見ても水の上は飽あきなかった。この江戸川えどの流れはどこからこんなに水をたたえて漫まん々と流れているのだろうと思うのだ。——薄青うすあおい色の水が、こまかな小波なみをたてて、ちやぶちやぶと岸の泥どろをひたしている。広い水の上に、尾おの青い鳥が流れを叩くようにすれすれに飛び交っていた。後の堤の上を、自転車一台走って行った。千穂子はさっきの、耳のない男の後姿をふつと思いついている。

どうしても、死ぬ気にはなれないのが苦しかった。本当に死にたくはないのだ。死にたくないと思うとまた悲しくなつて来て、千穂子はモンペの紐でじいっと眼をおさえた。全速力で何とかしてこの苦しみから抜けて行きたいのだ……。明日は隆吉が戻つて来る。嬉うれしくないはずはない。久しぶりに白い前歯の突き出た隆吉の顔が見られるのだ。いまになつてみれば与平との仲が、どうしてこんな事になつてしまったのか分わからない……。自然にこんな風にもつれてしまつて、不憫な赤ん坊が出来てしまったのだ。——長い事、橋の上

に蹲踞しゃがんでいたせいか、ふくらっぱぎがしびれて来た。千穂子は泥の岸へぴよいと飛び降りると、草むらにはいりこんで誰かにおじぎをしているような恰好で小用を足した。いい気持ちであった。

(昭和二十二年一月)

青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 林芙美子」筑摩書房

1992（平成4）年12月18日第1刷発行

底本の親本：「現代日本文学大系 ㊦ 林芙美子・宇野千代・幸田文集」筑摩書房

1969（昭和44）年

初出：「人間」

1947（昭和22）年1月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5186）を、大振りにつくっています。

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年11月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

河沙魚

林芙美子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>